

## その2

### 万葉集由来の「令和」



大宰帥大伴の卿の宅に宴してよめる梅の花の歌、序

「天平二年の正月の十三日に、師老(そちろう)の宅へあつまりて、宴会(うたげ)を申(の)ぶ。時に、初春の令月(れいげつ)にして、気淑(よ)く風和(やはら)ぐ。梅は鏡前(きやうぜん)の粉(ふん)を披(ひら)く。蘭(らん)は珮後(はいご)の香を薫らす。しかのみにあらず、曙(あした)の嶺に雲移り、松は羅(うすもの)を掛けて蓋(きぬがさ)を傾(かたぶ)く、夕の岫(くき)に霜結び、鶏はうすものに封(と)ちられて林に迷ふ。庭には舞う新蝶(しんてふ)あり、空には帰る故雁(こがん)あり。ここに、天の蓋(やね)にし地(つち)を坐(しきゐ)にし、膝を促(ちかづ)け觴(さかずき)を飛ばす。言(げん)を一室の裏に忘れ、衿(きん)を煙霞(えんか)の外に聞く。淡然(たんぜん)自らを放(ゆる)し、快然(くわいぜん)自ら足る。もし翰苑(かんえん)にあらずは、何をもちてか情(なさけ)をのべむ。誌に落梅の篇を紀(しる)す、古今それ何ぞ異ならむ。よろしく園梅を賦(ふ)して、いささかに短詠(たんえい)を成すべし」

(天平二年正月一三日に大宰帥旅人の家に集まって宴会を開いた。季節は初春のよい月であって気候はよく、風も温和である。梅は鏡の前の白粉を漂わしたように香り、蘭は珮玉の下の香袋を薫らせたようである。そればかりでなく明け方の山の峰に雲は移って、松は薄絹を掛けて絹傘を傾けたような面持ちである。夕方の山の谷には霧がただよって鳥は薄い網に閉じこめられて林に迷っている。庭には生まれたばかりの蝶が舞っていて、空には北へ帰る一羽の雁が飛んでいる。こうした風景の中で、天を絹傘にし、地面を座席にしてお互い膝を近づけ杯を飛ばす。言葉を一室の内に忘れたように語り、襟を霞の外に開く。心は淡々として開放され、心よさは充足している。もし文筆でなければ何を持って気持ちを述べようか。詩に落梅の篇章を記す。昔も今もそれはどうして異なることがあろうか。庭園の梅をそのまま言葉にして少しなかり短歌を読もう)

(巻5・815前の序)

万葉集が古と今、つまり、万葉の時代と現代を結びつけた、と前回書いたが、今回の梅花の歌の序にあるように、まさに「古今それ何ぞ異ならむ」である。そして今、その最も「万葉集ナウ」な例が、新元号「令和」であることは言うまでもない。すでに旧間に属することでありきたりではあるが、まずは、この万葉集由来の新元号「令和」から取り上げなければなるまい。



太宰府政庁跡

わが国最初の元号「大化」（西暦 645 年）から「平成」まで元号の数は 247 に及ぶが、その典拠は判明しているだけで 77 とされており、そのすべてが中国の古典に由来する。出典が国書となったのは、今回が初めてのこと。万葉集の歌は、漢字の音だけをあてる、いわゆる万葉仮名で表記されているため元号等への引用は難しかったが、「令和」の出典は、万葉集巻 5 に収録された梅花の歌の「序」からだった。この梅花の歌は、大宰帥大伴旅人が開いた梅花の宴で詠まれた 32 首が収められているが、「歌」と違い、「序」は表意文字としての漢字を使った漢文体であることから、元号に引用されたものである。

その部分の原文は、「初春令月、氣淑風和」となっており、「令和」は、「令(うるわし、或いは、よ)き和」の意となる。政府は発表に当たって、次のように説明している。「令和」とは、「令 = Beautiful」+「和 = Harmony」、つまり、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意であるという。確かに、新しい時代に相応しい命名であり、誰もそう願っている。これまでのところ大方の反応は良き、そう、令き年号とされているようだ。

しかし、この年号の「令」に一部違和感があることも確かだ。令の主意は、命令、言いつけで、その他、掟、則、地方長官、次官等が続き、良い、とか、立派という語釈は、どの国語辞典も、4～5 番目以降にしか出てこない。まさにその通りで、古代文字を見てみると、それが明白だ。令の冠は、「人を集める」、その下は（冠に対して足と言うらしい）、明らかに人が膝をついている絵



白川静記念東洋文字  
文化研究所 HP から

のように見えるが、その通りで、「ひざまづいて頭を垂れる」という。つまり、「人を集めて従わせる」のが、この「令」という文字である。

この新元号を初めて目にした時、この「令」の一字を使った例があったことをふと思い出した。『神風特別攻撃隊の記録』（昭和 38 年刊）の特攻第 1 号の出撃の記述だった。その部分を抜粋する。

くかねて大西長官が残していった水筒の水を蓋に受けて、各搭乗員が次々に飲みほして別れの盃とした。その時だれからともなく、「海行かば」が歌いだされ、合唱は低く流れて行った。やがて出発の「令」が下った>



1944 年 10 月  
関大尉が突撃したとされる  
空母セント・ロー  
フィリピン・レイテ沖

ここに記録されている、出発の「令」である。大西長官とは特攻隊を創設した大西瀧治郎中将のことで、中将が残した水筒の蓋を別れの盃として、最後に軍歌「海行かば」を歌った後、出発の「令」が下って、関行男大尉を隊長とする神風特別攻撃隊は出撃する。ところが 3 回目の出撃まで天候不良等もあり敵艦を発見できず、空しく帰還。そして、4 回目の出撃で米艦隊に遭遇、5 機全機が突入して散華する。関大尉は 2 階級特進し中佐となり、「特攻第 1 号」として華々しく発表され、軍神と称えられた（特攻第 1 号は別人、という説もある）。ここに書かれているように、別れの水盃が、盃や茶碗ではなく、水筒の蓋で、それも、敵艦を見つけるまで 4 回の出撃、つまり、別れの盃と出発の令を 4 回も受けざるを得なかった若者たちの心中を察するにあまりある。

この場合の「令」は、「人を集めて従わせる」という定義の通り、若者を集めて、死の特攻に従わせた「令」である。このように「令」は常に権力に結びついており、上から下への令で、国民の命を奪う令、文字通り、「命」「令」である。

（なお、この記録にある軍歌「海行かば」は、家持作詞とされているが、それについては、後の話）



菅官房長官(当時)  
2019年4月1日

ところで、この「人を集めて従わせる」の典型的な例が最近起きている。新元号発表に当たった当時の菅官房長官、現総理大臣が、「令和おじさん」として親しまれ、話題になったことは、まだ記憶に新しい。そして、安部前総理の後任として総理就任早々問題になったのが日本学術会議の任官拒否問題である。これまでは、学術会議の推薦に基づき、総理大臣が形式的に任命してきたが、菅総理はその前例を破り、6名の候補者の任官を拒否する。明らかに、総理が学術会議に対して任命拒否の「令」を発したのである。総理の権力を見せつけ、独立性の高い学術会議の人事に介入し、「学者を集めて従わせる」ことにしたのである。令によって人々を集めて従わせることで、自由であるべき学術、文化、歴史が生まれ育つわけがない。元文部官僚の寺脇研氏は言う。「学問の自由や表現の自由は、この国にはずっと前から存在している。それこそ天皇から庶民まで詠んだ『万葉集』の時代からあるもの。それが、私たちの国の文化や歴史なのだと改めて考えるべきです」。

学術会議への令はもとより、2度と再び特攻の令など繰り返すことがあってはならない。たたき上げで庶民出身の総理として、新元号の初心、万葉集で使われている「令(よ)き和」本来の「令和おじさん」に戻って、改めて政治に取り組んでほしい。「令和」は、万葉集由来の命名であって、それを「命名」ならぬ「命令」にすり替えることで、万葉集を誤読し悪用してはならぬ。その例が過去いくつかあっただけに、これは一国の宰相に対する「万葉集宣伝係」からの令である。

